共同研究プロジェクト「東アジアの社会変容と国際環境」研究会 2008 年度第 1 回
日時：2008(平成 20)年 7 月 12 日（土）、午後 10 時より午後 6 時
場所：AA 研 3 階大会議室（303）
報告者と報告タイトル：

司会：江夏由樹（AA 研共同研究員、一橋大学）
1）Igor Saveliev（名古屋大学）「第一次世界大戦期の中国人移民―ハルビンにおける契約労働者の募集及び帰国問題と中東鉄道の役割―」
2）上田貴子（近畿大学）「商工業者からみる哈爾濱の中国人社会」

司会：中見立夫（AA 研所員）
3）インターラクション／研究情報交換の場：ハルビンへのまなざし／
生田美智子（大阪大学）、澤田和彦（埼玉大学）、Joshua Fogel（ヨーク大学）

司会：西山克典（静岡県立大学）
4）Larissa Ousmanova（島根県立大学）, 「ハルビンにおけるロシア系ディアスポラの民族コミュニティ：タタール人コミュニティを中心にして」
5）中嶋　毅（首都大学東京）「満洲国時代のハルビンのロシア人高等教育」

司会：貴志俊彦（AA 研共同研究員、神奈川大学）
6）Olga Bakich（トロント大学）, “Russian life stories at Harbin after the end of WW2 viewing from my own experiences”

「戦後」ということばが一般に使われなくなって久しい。そして「戦前」への記憶も、すでに記憶をもつひとびとが少数派となってしまった。そのようななかにあって、戦前の「満洲」つまり現在の中国東北地域に関しては、日本人の記憶から忘却されるどころか、近年ますます、さまざまな角度から関心が寄せられているのはなぜか。しかし「満洲」に対して、ことさら関心をいだくのは、日本人ばかりではない。社会主義体制崩壊後のロシアにおいても、「満洲」への記憶がよみがえり、若い世代のあいだでも関心が高まっているのは興味ふかい現象といえよう。だがロシア人（在外ロシア人もふくめて）のあいだでの「満洲」への関心は、ハルビンという、ひとつの都市の存在へ収斂されている感がある。

しかしハルビンは、決して中国人、ロシア人、そして日本人のみが活動する街ではなかった。たとえば 20 世紀初頭、ハルビンでは中東鉄道庁の支援のもとで、モンゴル語新聞が発行され、モンゴル人のあいだへ時代状況を伝えている。その編集者のひとり、内モンゴル出身のハイサンは、モンゴルの独立運動で重要な役割を演じ、外モンゴルに成立したボグド・ハーン政権の高官となった。またハルビンにはタタール人のコミュニティーが

あり、タタール語による出版もおこなわれていた。ハルビンは蜃気楼のごとく登場した「アジアにおけるロシア人の街」であったばかりではなく、むしろその異種混交性、ハイブリッドな性格にこそ、都市としての特色がみいだされる。今回の研究会では、このハルビンの「異種混交」性に焦点をあてた。

今回のゲスト・スピーカー、Olga Bakich（Ольга Михайловна Бакич）氏は 1938 年ハルビンうまれ。氏の祖父、Андрей Степанович Бакич は、モンテ・ネグロ出身の反革命軍少将で、シベリア内戦で歴戦ののち、モンゴル方面へ敗退、1922 年、赤軍に捕われ銃殺された（А.В.Ганин, *Черногорец на русской службеж: Генерал Бакич*, Мос.2004 参照）。父、Михаил Андреевич Бакич はハルビンへ逃れ、ハルビン工業大学を卒業後、中国東北地方で建築技師として活躍した人物。バキッチ一家は 1959 年にオーストラリアへ出国、Olga 氏はオーストラリアで学位を取得したのち、カナダのトロント大学で教鞭をとった。ハルビン出版ロシア語文献書誌、*Harbin Russian Imprints: Bibliography as History, 1898-1961: Materials for a Definitive Bibliography* (New York: Norman Ross Publishing Inc., 2002)の著者、また東アジアにおいて活動したロシア人の史料・情報をまとめた専門誌、*Россияние в Азии* の編者・発行者として知られる。今回はバキッチ家のファミリー・ヒストリーと、戦後ハルビンでの自体験にふれながら、ロシア人社会の変遷を語った。

Igor Saveliev 氏は、РГИА などのロシア語文書館資料にもとづき、第一次世界大戦期、ハルビンにおける中国人移民について、上田貴子氏は、哈爾濱の商工業者からみた中国人社会を考察した。

Larissa Ousmanova氏はカザン出身、島根県立大学で学位を取得。最近、*The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia: Transformation of Consciousness: A Historical and Sociological Account between 1898 and the 1950s* (Tokyo: Rakudasha, 2007)を刊行しているが、ハルビンのタタール人社会について、タタール語資料にもとづき論じた。中嶋毅氏は、戦前期ハルビンの学術教育機関の実態と特異性を、ロシア語文献にもとづき、詳細に考察した。

「インターラクション／研究情報交換の場」では、今回のテーマに関連する研究をおこなっている、「ハルビン・ウラジオストクを語る会」（生田美智子氏から）、「来日ロシア人研究会」（澤田和彦氏から）について、その活動を御紹介いただいた。

なお今回の研究会開催にあたっては、科研費補助金・基盤（A）「17－20世紀の東アジアにおける“外国人”の法的地位に関する総合的研究」（研究代表者・貴志俊彦）および基盤研究（B）「ロシア帝国と「東北アジア」の成立―国際関係史の立場から―」（研究代表者・中見立夫）から協力をえた。